《研修報告》第７８回全国都市問題会議
テーマ：人が集いめぐるまちづくり
　　―国内外にひらかれた都市の活力創出戦略−
会場：岡山市岡山国際ホテル
主催：全国市長会　公益社団法人後藤・安田記念東京都市研究所
　　公益社団法人日本都市センター　岡山市

［研修目的］
●大きく変化しようとしている社会情勢や地域社会の状況。全国の各都市では、特徴をいかした地方創生に向けた取組が進められている。都市行政の様々な分野における課題解決や政策に企画・立案においては、いかに都市の魅力を創出していくが重要なテーマであると考えられます。経験や研究成果に基づいた講演と報告、パネルディスカッションを通じて、各都市が抱える共通の課題の解決の糸口を探る。

第１日　10 月 6 日（木）
基調講演　9:50～11:00
「まちの見方、見つけ方」　池内　紀氏（ドイツ文学者、エッセイスト）
　ドイツ文学者の立場から、日本について感じていること率直に語られました。
　ドイツと日本は、廃線から復興、高度経済成長へとたどった道が双子のように似ているといいながら、ニュールンベルグ裁判の後に、自国で自国を裁いたアウシュビッツ裁判から国民性を比較しています。
　街並みの復元、そして、歴史の教科書は現代社会から始まるなど、ドイツの人たちは、常に自分たちの歩いてきた時間を忘れないのだそうです。福島原発事故以降に検討された原発利用についても、技術的にできうることでも倫理にたがうものを使い続けてはならないとした倫理委員会の答申を即断即決しています。日本人はドイツ人に比べて倫理、協同、義務に対して鈍感であると厳しい評価でした。
　歴史に学ぶ、忘れない、道に名前があること、まちが合併しても名前を繋げていくから長い名称になるなど、何故を知ると、人の想いも伝わってくることがわかります。
　日本は、山や浜や平野などの地理の差、はっきりした四季という見事な多様性に恵まれている点、加えて、水道の水が当たり前に飲める整った生活環境があることを強みにできるというのがエッセイストの視点でした。もう１日滞在を延ばそうかと思えるまちが増えることを祈っているというお話でした。

主報告 11:00～12:00
「人口減少における都市の活力創出」　大森　雅夫氏（岡山県岡山市長）
観光は、光をみること。光とはその土地の歴史、文化であるという切り口から、岡山市の５つのポイントを報告。桃太郎のまち岡山は、住みやすさに磨きをかけています。
① 造山古墳、後楽園、岡山城などの歴史
② 周遊パッケージ化、４市で知恵を出し合う瀬戸内ブランド

③ 作家浅野温子氏（バッテリー作者）にストーリーを依頼
④ イクボス宣言、待機児童の見直し→東京へも出て行くが、周辺から転入がある
⑤ まち周辺の空洞化→路面電車、ももちゃりなどの取り組みで人の流れを変える。

一般報告　13:10～17:00

「人を惹き付ける都市空間とその文化力」　陣内　秀信氏（法政大学デザイン工学部教授）

スクラップ＆ビルドからの発想の転換により、注目すべき事例を報告。

ゼロから創り出す都市は魅力を生まない、ボローニアの成功は歴史的中心に活気が戻ったコンパクトシティの成功例です。水の都ヴェネチアは水上、迷宮、祝祭、劇場、五官の都市且つエコシティといった複合機能、人間的尺度からもまちづくりのキーワードが揃っています。川越も歴史的空間の再評価した例です。

日本は歴史と開発が共存する二重構造になっています。

大阪北浜テラスをはじめ、ミズベリングはクリエイティブな都市空間になっています。屋外空間の活用、凹凸地形や坂のあるまちの人気、小さなスケールが連動する地元派のマイナーなまちが人気だということでした。

今、最も求められているのは田園の風景と地産地消の魅力であるとの報告でした。

「交流とにぎわいのまちづくり」　森下　豊氏（奈良県橿原市長）

奈良県橿原市は、日本国発祥の地です。大仏商法（座って客を待つ）から魅力度８位、しかし宿泊数全国最下位になっていました。

明日香村と高取町と橿原市で飛鳥モデルを立ち上げています。まちづくり連携協定の奈良モデルを取り組んでいます。

神事との関係から歴史を知り、まちづくりを進めています。

新たな試みとして、PFI で庁舎の上にホテルを建築することになっています。

古代日本の中心的な遺跡群が数多く残っているまちに、今後インバウンド（外国人が訪れて来る旅行）も期待しての施策となっています。

「革新的サイバニックシステムによる社会変革・未来開拓への取り組み」

山海　嘉之氏（筑波大学大学院教授/サイバニクス研究所センター長/内閣府 ImPACT プログラム PM/CYBERDYNE(株)社長・CEO）

重介護ゼロ社会は、もう目の前に広がっていました。

サイバニックシステムにより、これまでなおることは不可能とされてきた麻痺の改善、機能補助が現実となっています。

社会変革＋科学変革＋市場の連動が重要となってきます。「no を new にかえる」「描いている未来によって変わってくる」との姿勢が時代を創っていくと感じました。

重介護ゼロ社会も活力、人材創出も自治体政策でリノベーションが決まるとの報告でした。

＊「society 5.0」は、日本政府により閣議決定された科学技術政策の基本指針。人工知能・ビッグデータ・ユビキタス関連の情報技術を従来の技術と組み合わせ、社会のあらゆる分野で新しい製品やサービスを提供できるよう、研究や開発、投資を進めようとするもの。内閣府が設置した総合科学技術・イノベーション会

議が、平成 28 年度（2016）から 5 年間の科学技術政策を策定した第 5 期科学技術基本計画において重要な基本指針として掲げた。名称は、人間の社会構造において、狩猟・農耕・工業・情報に続く 5 番目の変革と位置づけている。

第２日　10 月 7 日（金）
パネルディスカッション 9:30～12:00
コーディネーター
人が集いめぐるまちづくり―国内外にひらかれた都市の活力創出戦略-
西村　幸夫氏（東京大学大学院工学系研究科教授）

魅力的なまちは、個性豊かなまちです。他と違う独自性を発揮している点で多様です。地元のある物、ベースとなる交通を生かしていく、且つ、安全で美しいまちを新たに生み出していくという点は、都市の共通部分であると言えます。

パネリスト
「みんなで創り育み成長し　みんなに愛され選ばれるまち」を目指して
末松　則子氏（三重県鈴鹿市長）

鈴鹿市は、鈴鹿サーキットで広く知られていますが、さらに地域資源として育てています。かつて、開催中等の渋滞が課題となっていましたが、富士スピードウエイに観客が移り、経済効果が低迷した経験から、環境整備とおもてなしのスタンスへと繋がっています。

平成１６年２月に全国で唯一のモータースポーツ宣言、また、三重県と近隣の４市１町と連携し、官民３７団体で構成される「鈴鹿 F1 に本グランプリ地域活性化協議会」を組織し、モータースポーツのまちづくりを進めています。

子育て支援では、子育て支援センターを核として集い、交流、繋がりといった子育て過程のストレス軽減や孤立感の解消に取り組んでいます。外国人の子どもたちの日本語学習支援、市内全域に地域づくり協議会の設立を目標にすると同時に、女性市長という視点を生かした「SUZUKA 女性活躍推進連携会議」も設立しています。

鈴鹿 PA スマート IC、企業誘致、マザー工場化、ものつくりのまちの特性を生かして市内高等学校に工業に関する学科等の設置を目指しています。就労支援と移住施策の融合によりまち・ひと・しごとの好循環を生み出そうとしています。

「食住近接のまちづくりと交流の促進による地域の活力の創出」
本間　源基氏（茨城県ひたちなか市長）

ひたちなか市の臨海部は、東海村との間にまたがり、広大な開発地が広がっています。この地区は、戦後米軍に接収され空軍の水戸対地射爆撃場として利用されていましたが、昭和４８年に返還、国・県・市村が連携してまちづくりを行ってきました。現在未利用地の計画的活用が課題となっています。グローバル産業の影響を受ける地域でもあります。

ひたちなか商工会議所では、ロスアンゼルス事務所を開設し、中小企業の海外展開をサポート、また、JA 常陸は商工会議所と共同でアメリカに地場農産物等を売り出そうとしています。

廃線の危機にあった湊線は、「おらが湊鐵道応援団」により支えられ、海浜公園まで延伸の動きになっています。これにより観光客の回遊性を高めることが可能になります。
　また、昨年度商工会議所が中心になって設立した「ひたちなかまちづくり株式会社」とともににぎわいの創出に取り組んでいます。

「アートイベントがもたらす地域への効果と課題」
工藤　裕子氏（中央大学法学部教授）
アートイベントは、美術、建築、音楽、文学等の催事ですが、アートプロジェクトと呼ばれるフェスティバルは歴史的には、最も古く中世の催事、音楽祭が起源ですが、２１世紀以降、自主運営組織を中心にまちづくりの推進の側面が強くなっています。
３年ごとのトリエンナーレ「瀬戸内国際芸術祭」は、２０１０年に始まり、海外からの来訪者も多く、ヴュジュアルアートだけでなく音楽、ダンス、そして食も重要な要素です。
明確なテーマのもとに人々が集い共働体制で進めていく、プロセスを大切にし、会期終了後も横断的なネットワークが形成されることが大きな成果となっています。
越後妻有トリエンナーレ、中之条ビエンナーレ、山形ビエンナーレはアートイベントであると同時に、少子高齢化、人口減少、過疎化、限界集落などの課題を抱える地方の活性化を目指す企画です。（＊ビエンナーレ＝２年毎）
定期的なイベントか一過性のプロジェクトか今後さらなる比較検討が必要とのことでした。

「後発組の挑戦−子どもたちに夢を！−」
木村　正明氏（株式会社ファジアーノ岡山スポーツクラブ代表取締役）
人口が１９０万人以上いてＪクラブがないのは福島、長野、岡山の３つだけでした。故郷岡山に、自分たちが生活に必要と感じているプロスポーツの存在が、プロシポーツ不毛の地でいかに受け入れられるのかに対する「挑戦」なのだそうです。
「子どもたちの夢と憧れとなるような存在」「家庭と地域と学校の三者が協働できる社会づくりに貢献する」「岡山の誇りたる存在」そう位置づけ、クラブの揺るがぬ存在理念としています。特に、地域の将来に対する寄与を考えた場合、子どもたちにはとことんこだわりたいということから「出前サッカー教室」「夢パス」を実現しているだけでなく、選手たちが給食先生や読み聞かせを行っています。
地元の人たちと協力しあい１００年続くクラブに育てていこうとしています。
ホスピタリティ（もてなし）日本一で、平均来場者数１万人を目指しています。

都市間競争時代に求められる『稼ぐ都市づくり』
木下　斉氏（一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス代表理事）
これまでのように国からの財源支援を待っているのではなく、自ら各種事業で稼ぎを生み出し、その歳入を財源にして公共サービスを拡充していく「稼ぐ自治」の時代です。
他にできないことに挑戦していくためにも「稼ぐ仕組み」を多く作り出さなくてはなりません。公共床面積の削減議論に、縮小均衡で減らすことだけではなく、稼ぐことによって従来と異なる持続可能な構造を作り出すことも可能になります。（歳入を増加させる公共施

設整備）
指定管理は既に古い手法で、これからは、民間賃貸＋公共サービス財源の創出により、人口減少の中でも地域の負担を軽減しつつ、特色を生かして競争力を生み出す、自立した稼ぐ都市づくりの推進が求められています。

［研修所見］
　多くの事例、チャレンジ、成功体験の報告から、歴史に学ぶこと、これまであったもの今あるもの価値を評価とマッチング、そして、人が求めるメンタリティを満たす要素の探求が魅力ある都市の条件であると考察できる。
「no を new にかえる」のは、郷土愛であるとも言える。
　ミズベリング、コンパクトシティ、パッケージといったキーワードはどのまちにも共有できる。
　飯盛川のミズベリング、17.65 km²のコンパクトシティ、鶴ヶ島市のリノベーションに生かせることは多いと思われる。

第２日　10 月 7 日（金）
行政視察　13:00～17:30
バイオマスツアー真庭

里山資本主義を実践している岡山県真庭市に伺いました。
　森林の面積が約79％の真庭市。高度経済成長以降、地域の様子に危機感を持った方たちが「21世紀真庭塾」に集まりました。
「ないものねだりでなく、あるものを使う、あるものを組み合わせていく」との考え方は森に寄り添って暮らしてきた歴史が見えます。
　昨年から稼働している真庭バイオマス発電所は、国内初の木質バイオマス発電施設です。発電規模は10,000KW（一般家庭22,000世帯分）総事業費は４１億円、真庭バイオマス発電株式会社が運営しています。従業員数は１５名です。
　地域内の未利用材の受け皿として機能しているだけでなく、小売り電気事業者「真庭バイオエネルギー(株)」と契約し電力を売電しています。
　また、年間１万KWの発電を維持する資源、樹皮や端材などを安定的に供給するために、森林組合と地域の関連企業が連携していました。
　真庭バイオマス集積基地は、建設費3億5,000万円、従業員数２０名、実施主体は真庭木材事業協同組合です。（2014年には建設費5億3,800万円の第２工場も稼働開始）
　電力自由化となった今年４月からは、真庭市役所と落合総合センターへ電気の一部供給が始まっています。
　いただいた資料を開けると最初に目に飛び込んできた のが‘合計特殊出生率2.21’です。ガイド役の発電所従業員の女性は、Uターン組だそうです。着実に暮らしと事業を繋いでいる成果であると感じました。
次世代に「真庭の森」を引き継ぎたいという住む人の思いが、バイオマス構想でした。